

仲良し時間

2023.6.3

小学校国語の教科書に、昔からずっと『ごんぎつね』という作品が載っている。日本の小学生が必ず学習する教材である。その『ごんぎつね』の最後は、裏口からこっそり家の中に入ったごんが兵十に見つかり、火縄銃で撃たれてしまう場面である。

そして、足音をしのばせてちかよって、今戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。ごんは、ばたりとたおれました。兵十はかけよって来ました。家の中を見ると土間に栗が、かためておいてあるのが目につきました。「おや。」と兵十は、びっくりしてごんに目を落としました。「ごん、お前だったのか。いつも栗をくれたのは。」ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

悲しい結末であるが、兵十はようやくごんの真心に気づき、和解することができた。この物語を通して、兵十とごんが伝えてくれているのは、完全な善人であることができない人間が、その弱さや誤解、葛藤などを乗り越えて、相手を思いやる力を発揮していく素晴らしさだろうか。

ごんは自分に銃を向けた兵十に対して恨みを抱くことはなかった。兵十には、ごんを殺してしまったことへの後悔の思いが続いたことであろう。しかし、そこで生まれた友情は、兵十の心の種火となって、その後の生きていく力になったに違いない。

人生を締め括るにあたっての死者と生者のかけがえのない和解のひと時、これを「仲良し時間」と呼ぶ人がいる。私たち人間は、死が近づいてくると、人生で縁のあった人たちへの感謝や相手を大切に思う気持ちを表現せずにはいられなくなるという。

病床で気力すらなかった人たちが、苦しい息の底から「いい家族が与えられて幸せだった」「皆のおかげだ。ありがとう」と口にしたり、意識がなかった人が微笑みかけたり、表現は人それぞれだが、愛と感謝の思いを伝えようとする。

いずれのケースにしろ、後で振り返ってあの時が「仲良し時間」だったのだと気づくことが多く、最期に大切な時間を共有することによって、様々なわだかまりや恨みが解消されていく。

『ごんぎつね』は、小学4年生の教材だが、これを小学6年生、あるいは、中学3年生の教材として取り上げたらどうなるか。小学4年生とは、また違った授業が展開されるはずである。火縄銃で撃たれてしまう場面は、必ずと言っていいほど、授業で扱われるところである。子どもたちは、様々な考えを出す。もしかしたら、大人になってから、「仲良し時間」のことを知り、兵十とごんのことを思い浮かべるかもしれない。